

近世金沢の考古学的研究 - 金沢城跡を中心に -

滝川重徳（石川県教育委員会）

金沢城跡は、金沢市街の中心、南東の山地帯から舌状に延びる小立野台地の先端部を占めている。この地は、天文 15 年（1546）に一向一揆の拠点として金沢御堂（金沢坊）が建設されて以来、近世には加賀藩前田氏の本拠として、北陸の政治・経済・文化の中核的な位置を保ってきた。

ただし金沢坊の堂舎の配置等については、後世の史料に一部言及があるのみで、疑わしいところも多い。また金沢城となって以後の具体像も、前田氏に先じた佐久間氏時代はもとより、前田氏初代利家、二代利長の頃まで、信頼できる史料はたいへん少なく、総じて寛永年間（1624～1643）以前の姿（以下、初期金沢城と呼称）は不明確であった。

しかし近年、道路整備、公園整備（平成 8 年 3 月圏以後城跡地は県有となる）、学術的調査等の目的で発掘調査が進行し、この間のデータが少しずつ蓄積されるようになった。金沢坊・初期金沢城の全体像を明らかにするには、まだまだ不十分であるが、現段階での成果を簡単に紹介したい。

金沢坊期

主要堂舎部分は全くと言って良いほど不明であるが、寺内町の一部と考えられる遺構が幾つかの地点で検出されている。石川門前土橋の調査（平成 4～6 年度、石川県立埋蔵文化財センター）では、土橋や堀が構築される以前、この場所に金属加工に関わる工房群が存在したことが判明した。また新丸の調査（平成 11～13 年度、（財）石川県埋蔵文化財センター）では、町屋的な遺構のまとまりが検出されている。ともに 16 世紀代の遺物を伴い、金沢坊期に形成されたと考えられるが、16 世紀末期に下るものも若干含まれており、前田利家の金沢城入城後もしばらく存続していた可能性が高い。

初期金沢城期

東ノ丸唐門一帯は、広義の本丸への出入り口として

重要な箇所であるが、付近の石垣には新旧の時期差が窺えることから、何らかの変遷があったことが予測されていた。平成 14 年度に実施された遺構確認調査（金沢城研究調査室）では、現在のルートの原型となる元和期（1615～1624）の石段・道路側壁石垣と、これとは異なるルートを示す文禄・慶長期（1592～1615）の石垣を検出した。

菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓石垣の調査（平成 10・11 年度、（財）石川県埋蔵文化財センター）では、二ノ丸東辺に連なるこれら櫓台石垣の下部に、三ノ丸とほぼ同じレベルで先行する遺構が展開していることが確認された。出土遺物の年代から、二ノ丸を画する石垣・内堀は寛永 8 年（1631）の大火以後に構築されたと考えられる。これは数少ない同時代史料の記述とも矛盾がなく、二ノ丸拡張に象徴される金沢城の確立が、寛永大火を契機とするものであったことを改めて認識させる成果となった。

城域の南側を画するいもり堀の調査（平成 10～12 年度、（財）石川県埋蔵文化財センター）においても、新旧二筋の堀が検出された。このうち新しい堀は、各種絵図にも記されており、「いもり堀」として明治期まで存続していたものであるが、この「いもり堀」に先行する堀・石垣を伴う土橋が確認されている。土橋付近では金箔瓦が出土しており、重要視された出入り口とみなしうるにも関わらず、後代に引き継がれていない点が興味深い。石垣や出土遺物の年代観から、新旧の切り替え時期は、元和年間（1615～1624）と考えられる。

ごく簡単に紹介したが、金沢坊期の様相は大部分が不明なものの、寺内町の一部とみられる遺構が検出され、初期金沢城期まで機能していたこと、初期金沢城の設計プランが、確立期の縄張りからは想像しがたいほど異なっていたことが判ってきたと言える。まだ緒に付いたばかりとは言え、発掘調査の進展は、北陸の織豊期・近世初期の研究全体にとっても大きな刺激となるものと考えている。